

ドラビズ *for Pharmacy* 【2025 年 12 月 23 日】 933 号

発行・著作：株式会社ドラビズ on-line <https://www.dgs-on-line.com/>

3.09%プラス実現の舞台裏

【ロートルの咆哮】 診療報酬改定 2026

「3.09%増」という数字に耳を疑い、眼を凝らし、鼻を鳴らした関係者も多かったことだろう。2026 年度診療報酬本体の改定率は 30 年振りの 3%超えという高水準。この結果について一般紙、業界紙ともに解説しているが、高改定率に結び付いたのは「高市早苗総理の存在」にある。ただし、彼女が内閣総理大臣として「最終判断した」という近視眼的な説明では不十分で、むしろ総理総裁に就いた瞬間に「このストーリーはほぼ仕上がっていた」（自民党執行部筋）のだった。

各紙の解説は、補正予算では物価高・賃金対策として医療機関に配慮した高市政権の流れから、診療報酬本体は財務省が 1%台に収める程度の主張に留めたのに対して、厚生労働省は 3%台を要求し、攻防は続き、最後は高市総理の決断だったというもの。しかしウラ事情は異なる。すべては人とヒトとの「関係性」だった。

まず、麻生太郎副総裁と日本医師会の横倉義武元会長の「深い関係」だ。地元福岡が「同郷」というだけでなく、安倍政権下では「財務省・副総理」と「会長」といった間柄のなかで、信頼関係を築いてきた。また、麻生副総裁の「懐刀」である松本純元衆院議員は、松本吉郎日医会長とは「親密な関係」にある。前回 24 年度改定では、松本会長をフォローする「日本医師連盟委員長特別補佐」の肩書で活動し、その関係は揺るぎない。

そして、松本純氏と高市総理は、彼女が政調会長時代の「政調会長代理」。この関係も維持されていて、総裁選での麻生、松本両氏による「支援」には、総理自身も恩義を感じているという。総裁就任後の自民党役員人事が、麻生副総理主導で進んだのも、こうした背景からだ。

さらに、12月1日に開催された松本純氏の「旭日大綬章受賞祝賀会」には、麻生氏や菅義偉氏といった歴代首相経験者を筆頭に自民党重鎮幹部が列席し、横倉氏や松本氏といった日医トップに、厚生労働省幹部はもちろん、財務省から大臣官房長や主計局の局長と次長も出席した。すなわち、松本氏は財務省幹部とも昵懇だ。つまり「麻生－横倉ライン」と「松吉－松純ライン」をベースに、自民党や財務省、厚労省といった「関係者みんなが協力」（自民党執行部筋）した結果、診療報酬 3.09%プラスという数字に結実した、というのが深層だ。

付け加えると、今回は日医、日歯、日薬の三師会会長が足並みを揃え、抜け掛けせずにまとまったことも大きかった。要はヒト。高市総理の最終決断は、その前段階の、人とヒトとの関係性によって実現したのだった。

医薬コラムニスト/ジャーナリスト
玉田 慎二